

令和元年度 国立中央青少年交流の家

富士のさと ボランティア養成研修

令和元年6月15日(土)～6月16日(日) 1泊2日

○目的

青少年の体験活動を支援するボランティアに求められる知識・技能を習得するとともに、ボランティア活動の意欲を高める。

○参加者

自然体験活動やボランティア活動に興味・関心のある
高校生、大学生、社会人

計69名(内訳:男性26名、女性43名)

(高校生:23名、大学生・大学院生:43名、社会人3名)



○事業の内容

(1)「国立中央青少年交流の家とは」 当所次長 桑山宗大

青少年教育施設の成り立ちや役割について学び、当所で実施している事業や代表的なプログラムについて紹介した。またグループでの活動を体験し、体験学習法の活動を通して学ぶ機会とした。



(2)「ボランティア活動の意義と心構え」

当所ボランティアコーディネーター 荒川大佑

当所でボランティアをするメリットは何か?についてワークショップを行い、ボランティアの意義について話し合った。また、ボランティアをする上で、心と身体の安全管理が大切なことや参加者ファーストであることを学んだ。



(3)「アイスブレイクでお互いを知ろう」

当所企画運営ボランティア

本研修の企画運営ボランティアがアイスブレイクゲームを行い心と身体の緊張をほぐした。今後の活動に対して主体的に活動ができるようねらいを設定し、参加者自身も実際の体験を通して、アイスブレイクの効果について学んだ。



(4)「野外炊事のいろは」 当所企画指導専門職 長谷川賢

実際に参加者を指導する際に重要となる安全管理を、過去の事例を踏まえて学ぶ機会とした。また野外炊事の進め方と安全管理の方法について基本的な技術を身につける機会とした。



(5)「ボランティア活動の実際を知る」

当所企画運営ボランティア

教育事業で活躍しているボランティアが実体験を語りながら事業紹介を行い、当所での活動のイメージを膨らませ、活動への意欲を高めた。



(6)「野外炊事の朝食～フレンチトースト～」

当所企画運営ボランティア

朝食作りは手軽にできるフレンチトーストを作った。活動中は参加者と指導者の目線を意識してもらうため、カードの役になりきって調理をし、活動終了後、理想とする指導者像について話し合った。



(7)「キャンプで実際に起きる傷病の応急処置」

講師：フジ虎ノ門整形外科病院 看護師主任 杉浦信志 氏

実際に起こりうる傷病発生の現場で、傷病者役を決めて班で相談しながら適切な応急処置ができるかロールプレイを行うとともに、正しい処置の仕方について学んだ。その後、アレルギー等の基本的な知識についてもレクチャーを受けた。



(8)「子どもたちの“いま”を知る」

講師：常葉大学短期大学部 准教授 遠藤知里 氏

グループワークで話し合いを深めながら、子供たちが気持ちを出すことを肯定することが、子供理解につながる。また、“いま”を生きる子供たちに対して、“いま”だからこそできる肯定的な支援が必要であることを学んだ。



《参加者の感想》

- ・ 参加をしてみて、正に私のやりたいことでした。子供と触れ合うことや同じ志を持っている人たちと共に活動することが、とても幸せに感じました。(大学生)
- ・ ボランティアのメリットや良い点、そもそも「ボランティア」とは何かをきちんと学ぶことができ、いい経験になりました。(大学生)
- ・ 本当に年齢の上下や男女の差を一切感じず、グループワークが多かったことで、チームの大切さ、人の交流の利点を感じることができた。(大学生)
- ・ 高校生の私でも参加しやすく、私のしたかったことと新しい経験が沢山でき、良い刺激になりました。(高校生)
- ・ 外部のボランティアに興味を沸いて、興味本位で参加してみました。2日間とても充実していて、新しい仲間、新しい知識など本当に意味のあるものになりました。(高校生)
- ・ 自分の苦手な部分ではなく、できるところを見つけて、前向きに取り組む姿勢をたくさん見せてもらいました。学校外での取組みの可能性を感じるとともに、学校現場でも活用できることを考えていきたいです。(社会人)

《成果と課題》

- 例年、大学生の参加者が多い研修だが、今年は広報の結果、高校生が全体の3割を占め、ボランティアへの興味関心が高校生の年代でも高まっていることが感じられた。
- 企画運営の一部を実際に活動しているボランティアスタッフに担ってもらうことで、活動の実際の声を参加者へ届けることができた。参加者からは「先輩ボランティアのようになりたい」「ボランティアに登録して企画などをしたい」などの声があり、ボランティアスタッフがロールモデルとなっている様子も窺えた。
- 高校生が土曜日に授業をしている学校も多数あり、今回の研修でも参加を諦めた方や遅れて参加し、事業後に補講を行った方がいた。今後も高校生の参加者が多くなると予想されるため、あらかじめ代替案や補講を設定するなどの対策が必要である。
- 参加者の時間や持ち物の管理が不十分な面もあり、この研修を受けた後は、子供たちを預かるリーダーとして、ボランティア活動を行う意識を更に研修内で参加者に伝える必要性がある。